

大町労山だより



VOL.1-NO1

2020 5/24

大町勤労者山岳会

新型コロナウイルスの自粛要請解除

山行記録

4/19 (日) 針ノ木岳に登って…菜穂子+3

山行に行く前日は雨が降っており、当日も朝まで雨が残りそうだったので行くかどうか悩んでいた。当日の朝まで雨が残っていたが、朝陽がさし虹が出ていたので行けると判断した。今年は、コロナの影響で扇沢の駐車場には私たちの車ともう1台の車しかなかった。

立山アルペンルートへの交通機関は閉鎖しており、トイレは、どこも閉鎖していた。唯一有料駐車場の近くのトイレが男女共同で開いていた。トイレを済ませて小雨の降る中、出発した。

最初からシールを付けての山行だった。順調に進んだが、大沢小屋の所まで来ると大量のデブリがあった。去年よりデブリの量が多く、去年より下の方まで迫っていてデブリの中を歩くことが大変だった。途中、休憩を挟みながら最後の急な斜面に差しかかった。去年は、最後の急登はアイゼンを装着して登ったが今回は、シールのまま登ることになった。トラバースをしながら登っていったが、シールは滑るし、急坂でとても息が上がった。

急な斜面を登り始めて1時間。去年なら針ノ木小屋に着く時間だったが、まだまだ着かない。小屋を目指すはずだったが、小屋より北側の斜面を登っていた。何度も休憩をはさみ、行動食を食べながら何とか上にたどり着いた。登りは、5時間半かかった。こんなに登ったのは、今シーズン初めてでとても疲れた。苦労して登った斜面も下りは早い。スキーで滑ると40分。滑り始めは、少しパウダーが残り滑りやすかったが下に行くにつれてストップ雪になった。途中から霧が出てきてとても滑りにくかった。視界が遮られデブリがあるところを滑る時はとても注意が必要で慎重に滑った。下に行くときようやく霧が晴れて滑りやすくなった。

BCは、とても楽しいものだが、いつもいいコンディションとは限らない。視界が悪くなったり、雪質が変わったり、デブリがあったり。しかし、どんな状況であっても無事に帰れるように準備や技術を身につけておく必要があると思った。

山の思い出

ストックと縁のないわたし みよちくりん

今から10年以上前のこと。餓鬼岳～燕岳縦走の帰りに寄った中房温泉に、まだ新しかったストックを置き忘れた。遠いのでそのままになっていたが、もしかしたら預かってくれているかもと、1年後にかすかな期待を抱いて、まだ、未登だった「有明山」のついでに寄ってみることにした。有明荘の裏手が登山口である。ところが、うっかりとそれまでに二度行っていた燕岳の登山口へ直行してしまった。駐車場で気が付き、車で戻ればすぐだがメンドクサイので、そのまま、燕に登ることにした。あの頃はやはり若かった。さっさと日帰りして、本来の目的である中房温泉へ行き、事情を話すと、奥から5、6組のストックを出してきてくれたが、残念ながら私の物はなかった。仕方ないので、

「じゃ、お風呂、お願いします」とバッグを見るとサイフがない。

「すみません。サイフ忘れたのでまたにします」と言ったら、

「いいですよ。入って帰ってください」と言うではないか。ストックがなかったので気の毒にと思ったのだろう。平日で空いていたし、ありがたく好意をうけて、ゆっくりと温泉に浸った。そして、お風呂から上がって着替える時、またもや肝心のTシャツがない。お風呂グッズに入れ忘れたのである。ズボンなどは穿いていたのでいいが、汗をびっしょりかいた上着だけはどうしても着たくない。車には薄手のフリースがあったので、それを着ることにした。さて、車までどうするか。幸い、いつもはスポーツタオルなのに、その日は大判のバスタオルを持って来ていた。これを羽織って行けばいい。しかし、フロントの前をいかにすり抜けるか。そろそろと玄関に向かうと、フロント女史は不在だったので、これ幸いと急いで靴をとり、かがんで履いているとき、戻って来たらしい女史が、何やらおかしいと感じたのか、

「どうかしましたか？」と頭の上から声をかけてきた。（あ～、見られた！）

「いえ、あの、そのですね。着替えを忘れたので車までこれで行こうかと思って・・・」という、笑いをかみ殺しながら、

「どうか、おうちまでお気をつけて帰ってくださいね」と言われた。ふつうは「お気をつけて」といっても「おうちまで」とは言わない。そこで私も、

「ハイ、まだ自分の家は覚えておりますから大丈夫です。お風呂、ありがとうございました」と胸元のバスタオルをしっかりと掴んで、深々と身体を二つに折ってお礼を述べると、彼女はそれまでこらえていた笑いを遠慮なく爆発させた。

計画していた「有明山」を忘れて「燕岳」に登ったことを彼女は知らないが、ストック、サイフ、Tシャツと忘れ物のオンパレードなのである。さぞかし今ごろ、かのフロント女史は、同僚に事の次第を話して笑っているに違いないと、我が事ながらアキレ果てて、帰りのハンドルを握ったのだった。

後年、労山へ入会し、念願の「有明山」へ登ることができた。その後も買ったばかりのストックを失くしたりと、私とストックは相性が悪いので、いまでも自分の脚を頼りに、ストックはお守り。ストックも置いてきぼりを食わないようにいつもザックにしがみついている。

槍ヶ岳登山の思い出

じゃんちゃ

昭和43年高校一年生の夏休み、槍ヶ岳に登りたいと父に話すと、牧の同級生藤原君が槍ヶ岳山荘（肩の小屋）の支配人をやっているからと連れて行ってもらうことになった。

小学校からの同級生N君を誘い、父が初めて買った車マツダファミリアで新島々へ。そのころはまだ自家用車がどこの家にもない時代であった。駐車してから松本電鉄のバスで上高地を目指す。バスの中は登山客や観光客で満杯状態。上高地への国道は奈川渡ダム等の工事最盛期で悪路を揺られながら上高地バスターミナルへ。降車後小梨平のキャンプ場に向かう。

当時は各高校が小梨平に大型帆布テントを張り夏休みの期間は開放していたので、そこに泊まることにする。小梨平のキャンプ場は黄色い屋根形のテントで満杯であった。野球部の猛者やマネージャーの女生徒が三人来ていたので明神池あたりまで遊びに出かける。



翌日、祖父から買ってもらったキャラバンシューズやズボン、シャツで槍ヶ岳を目指す。槍澤ヒュッテも牧の方が代々働いていた。写真を見ると父の支度は作業ズボンに地下タビ。雪渓を歩くにはさぞかし冷たかったであろう。写真を見ると指にタバコを挟んでいる父は40歳でヘビースモーカーであったが50歳で禁煙した。

グリーンバンドを過ぎ肩の小屋手前で藤原さんと会う。雪渓から溶け出す水をポンプで小屋まで送水する作業をしていた。小屋では手厚いもてなしを藤原さんがしてくれ、翌日早朝（昭和43年8月5日）槍ヶ岳頂上をめざす。頂上までの登山道を緊張して登った。小屋に戻ると父に足が震えていたと笑われた記憶がある。その後何度も槍ヶ岳の頂上に冬季も含め登っているが、なぜあの時はそんなに怖かったのであろう。

その父も本年7月で92歳。現在入院中で父の顔や体が日増しに痩せ、面会に行くたびに切なくなる今日この頃である。

エッセー

白馬岳は、「はくば岳」か「しろうま岳」か

白馬の山人

多少とも山に興味ある人で白馬岳をご存じない方はまずいないだろうが、その読み方は「はくば岳」か「しろうま岳」のどちらだろうか。私は、たぶん多くの人と同じように「しろうま岳」と読むのが正式ではあるが言いにくいので、ただ「はくば」とよんでいるのではないかとずっと認識していた。

ところが、そうではなく最初から白馬岳は「はくば岳」だったという解説に遭遇した。どちらでもよいではないかという意見もあるだろうが、いわゆる山やさんは「あれは『はくば』ではなく『しろうま』だ」とこだわる人が結構多い。「はくば岳」というのは間違いだ、そう信じて疑わないとすれば、逆に「はくば岳」読みが正しいという根拠を示されれば反論できないのではないか。

「しろうま岳」とよぶ理由は、ご承知のように「代掻き馬」から来た、あの雪形が現れればお百姓さんは田植えの準備をする農事暦なんだと多くの人はいうし、ほとんどの書ではそう書いてある。いやすべてと言ってよいかもしれない。（例えば、深田久弥は『日本百名山』で、「ハクバは誤称で、田植えにかかる前の苗代掻きをする頃この馬の形が見え始めるので、苗白馬の意味で代馬と呼んだという」とある。インターネットの [Wikipedia](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%9F%B3%E5%B9%B4%E5%B9%B8) でも同じように書かれている）

昨年、白馬山案内人組合創立100年を期に発行された『100年の息吹』（『息吹』と略す）という記念誌に、少なくとも私には新しい見解を知ることができた。結論から言えば、もともと代掻き馬・代馬（これを雪形起源説）ではなく、あの雪形は「稜線を天駆ける白馬の姿」（山容起源説）であると説く。その代表は明治37年から13年間連続して登った旧制長野中学の生物学教師であった志村烏嶺が著書『山岳』の「白馬岳第1回登山記」に「残雪白駒の蒼穹を奔騰するが如し。故に信州の土民呼んで白馬と言ひ」と書いているという。

さらに、江戸時代末期の文政8年（1825）の豊1豊を超すという現存する絵地図に白馬嶽と書かれており、これが「白馬」の文字が使われた最古の記録であり、明治13年の長野県地理教科書の地名索引では山名が白馬でハクバとふりがなされているという。それに対しようやく明治44年（1911）年の『山岳』で「白馬嶽はシロウマダケにしてハクバに非ず」とあり、その後代馬岳と呼



2020年4月15日 鈴木撮影

ばれ、「雪形を農事暦とする農民の姿が折からの浪漫主義的風潮と合致して、“シロウマ読み雪形説”の普及に拍車を掛けたという。

いまの村内では「シロウマ〇〇」と呼んでいるものには幼稚園や宿などきわめて少ない。村名も「ハクバ村」であり、駅も「ハクバ駅」(かつては信濃四谷)である。しかし、高山植物の花の名はすべて「シロウマ〇〇」である。『息吹』では「ハクバかシロウマか、確定的な答えを出すことは困難だ」としながらも、「白馬主峰から小蓮華、乗鞍にかけてたおやかな曲線は、白馬の疾駆する姿に見える」と書いて“ハクバ”の響きを強調し、シロウマ岳と呼ぶのは自分を



私と呼ぶときのようなよそ行き感に対し、「ハクバ岳と呼ぶときは心の通うおらが山をイメージするのは多くの村民に共通したことではないか」と結んでいる。つまり断定はしていないが、「代馬岳」(白馬岳)は作られたのであり、白馬岳でいいのだと。

私も「ハクバ岳」と誤った呼び方をあえてしているという負い目を感じる必要はないのだと思った次第である。

子馬の雪形

白馬に10年住んで雪形と代搔きの関係には個人的に若干の疑問を持っていた。それは、「代搔き馬」の雪形は3月でも見えるし、本当に代搔きと関係があるのか、実際には小蓮華山の稜線近くにわら細工のような子馬の雪形が出る頃に村内での代搔きは始まっていると以前から感じていた。何かの本で、お百姓さんは子馬の雪形を田植えの目安にしていたというのを読んだことがある。

いずれにせよ、白馬岳や爺ヶ岳の種まき爺さんや鹿島槍の鶴と獅子、蝶ヶ岳の羽を広げた蝶など、里から見える雪形には浪漫がある。奥深い山の穂高や槍には雪形はない。あるかもしれないが、里から見えることがないため昔の人には縁遠いものだったのだろう。

気になるので、図書館で『白馬村誌』(発行白馬村)を借りて調べてみた。(なぜか村史ではない)

それによると『しろうま』と呼ぶのが正しい。明治の頃は皆しろうま岳と呼んでいた。・・・山名の起源やいわれ(鈴木注:例の代搔きのことと思われる)を知っている者にとっては誠に淋しい限りで、白馬岳の呼び方は「しろうま岳」が正しいことを再認識してもらいたいものである」とある。その理由として、明治30年代に次々に発見された高山植物は「シロウマ」である、地元の「山岳の唄」も「ここはしろうま雪溪一里・・・」と歌われ、北城小学校校歌も大正まで「高くそびえるしろうまや・・・」だったことをあげている。『村誌』は北城村と神城村が合併して白馬村になったことを記念して編纂し、平成6年(1994)10月に発行された。『息吹』は昨年2019年発行なので25年も古い『村誌』は執筆者の思い入れで書いたと考えるべきなのだろうか。

なお、「大きな黒馬の雪形(鈴木注:例の代搔き馬のこと、で周囲が白い雪で馬の形が黒いのでそう表現することもある)・・・長期間にわたって見られ、農作業のシュンを教える馬ではない。この雪形は初雪の頃にも見られる」「仔馬は、・・・白馬岳の馬の雪形の中では一番農作業のシュンを教えるように現れる雪形」として、私の認識と一致した。

あわせて山案内人組合事務局の方に電話して聞いてみたところ、現在活動している案内人は4~50代が中心で、育った白馬北小学校では校歌で「白馬山」と歌ったので、「はくば」読みの気持ち強いとのことだった。(因みに、北小学校のHPに校歌があるが、わざわざ(注)「白馬山(はくばさん)」は原作では「白馬(しろうま)や」となっているが、いつからかこのようにうたわれてきた。)と書かれてある。

山の思い出

県連女性委員会 2泊3日山行のエトセトラ・・・E I E I

今から遡ること私が40代後半から50代頃の話です。

当時、県連女性委員会は結構活動していて私はその一端を担っていました。全県交流山行、1泊2日の山行、のちに2泊3日になり北ア、南アと山行を組んでいました。県連で募集し各山岳会の女性メンバーが集まり、定員8名ほどで登っていましたが、そのうちに男性も加わりました。皆、仕事を持っており日程変更などできるよしもなく、そして今日のように天気予報もあてにならず何としても登山口までは行こうとよく前夜発で出かけたものです。そんな中から、忘れられない敗退した山行のお話を・・・。

北ア…爺ヶ岳～五竜岳 2泊3日の山行。

年度は覚えていませんが、10月10日の頃、柏原登山道から、本来なら冷池小屋まで行く予定でしたが、佐久のメンバーが遅れて予定通りに進まないことと天候が怪しくなり、種池山荘に泊まって皆で考えようと。しかし、翌日は悪天で風が強くなり前に進める状態ではなく、小屋で対策会議。五竜は断念し下山しようとなる。皆、3日間の休みを取っているのもこのまま帰りたくない、日帰りでもいいからどこかに登りたいという。そこで提案したのが、風吹大池でした。下山して北小谷の風吹山荘に泊まり、翌日日帰りで風吹往復。その日は快晴でした。

南ア…聖岳

前夜土砂降りの中、南信濃村下栗から遠山川沿いの林道を山深く走る。後もう少して聖岳登山口聖光小屋に着く手前で車パンク。当時男性が2名参加していた。みんなで助け合いながらタイヤ交換する。先行車の仲間が付いてこないの心配になったと迎えに来て、パンク??と驚いていた。登山口はほんとにすぐだった。小屋に隣接するキャンプの炊事場の中にテントを張る。濡れなくて助かる。

”翌日は雨が上がる“と天気予報を信じて決行したが、空は芳しくない。行程は長いし危険を感じる。協議の結果敗退の結論となる。帰りに食材がたっぷりあるので、あるお店で焼肉用のガーデンがあり貸してもらいお腹に詰めた。そこでまた、3日間休みがあるのでどこかに日帰りで登りたいという話題が・・・。大町労山で木曾御嶽山行があったのでそこに何人か参加する。当日は快晴であった。道中、大町労山の現会長が登山靴を忘れたと車中大騒ぎ、そんな中田舎の雑貨屋さん立ち寄りすると幸運にも運動靴がありサイズもぴったり。”これで登れるじゃん“と勢いづく。御嶽山の頂上で火口湖を見下ろしなら昼食をとった場所がまさか何年か後にあんな大噴火になろうとは・・・。

聖岳には会員になってまだ数年の頃、同じ新潟県出身の会員に連れて行ってもらった。ヒルに食われた記憶が鮮明に残って、山の山頂での記憶はない。その後、県連女性会員数名と登ったが長い登山道に今自分がどこを歩いているのだろうと不安になった。そのくらい標識も目印もない登山道であった。今ならスマホで位置確認できるでしょうね。聖岳の小屋はオンボロで私たちしか宿泊者はいなかった。小屋から3時間半位かかり山頂に。北アの山と比較してとてつもなく大きい山容で隣の兎岳も同じく大きかった。

裏銀…黒部五郎岳

年度は不明、秋の頃。2泊3日の日程で神岡経由にて前夜出発。有峰有料道路は時間制限があり、手前で車中泊。その時も天候悪化で士気も低下し、やめようと結論。でもこのまま帰ったらつまらないと山から海へ転じ、富山湾を目指して、射水市の日本丸(帆船)を見ながらまた食材を減らす。そして今夜の宿探し、氷見で魚を食べたいと探しに探して10件目で漸く見つかった。山など忘れて魚づくしに魅了され幸せな時間が流れた。

翌日は富山湾から立山連峰を眺めつつ、天気が良かったらあそこの山に立っていたのにと・・・。のちのち、黒部五郎岳には再チャレンジで登っている。

天気の話（3）

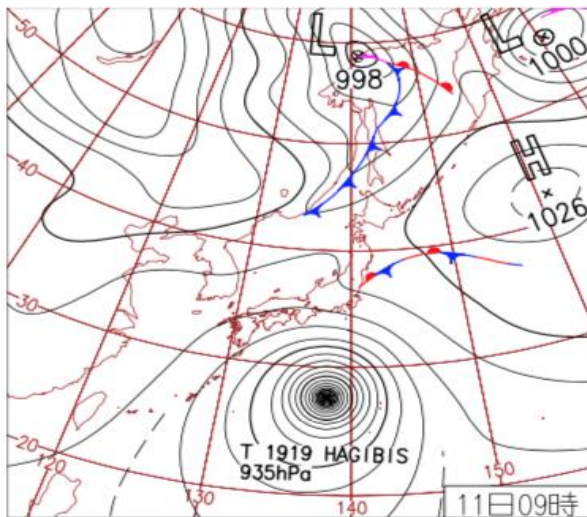
台風は進路に注意

五十畑 茂 2020.5.23

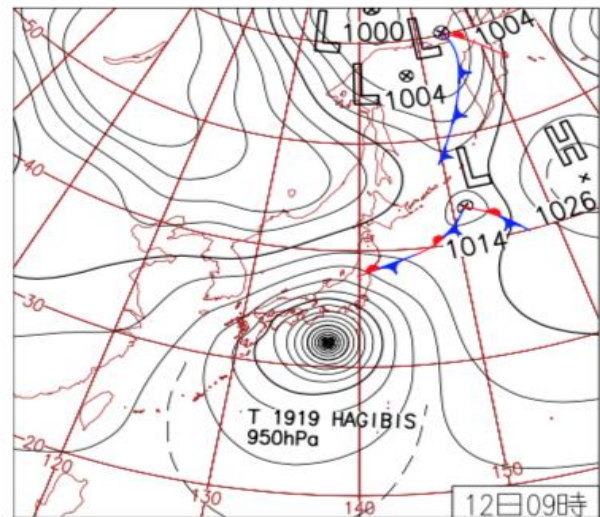
ここ数年海水温の上昇もあり台風が大型化して被害も甚大になっています。2019年10月12日に長野市で千曲川の堤防が決壊して大変な被害が発生しました。

台風は低気圧で左回りなので東側に南から暖かい湿った風が吹いて大雨を降らせることになり、千曲川に今までにないような豪雨によって堤防が決壊して大きな被害が発生しました。

中心気圧が日本近海で950hPaまで発達して南岸沿いに北東に進み前線を刺激して大量の雨雲が発生したため、このように太平洋側を進むときは特に注意が必要です。



11日(金)非常に強い台風が北上
大型の台風第19号が非常に強い勢力で日本の南を北上。台風周辺の雨雲や前線の影響で東日本～東北を中心に雨。東京都八重見ヶ原では最大瞬間風速37.0m/s。



12日(土)東日本と東北,特別警報
台風第19号が伊豆半島に上陸。東日本と東北に大雨特別警報。神奈川県箱根の日降水量922.5mmは全国の史上1位を更新。東京都羽田の日最大風速34.8m/sは史上1位を更新。

台風の強さと大きさ（気象庁の規定）

強さの階級分け

階級	最大風速
強い	33m/s (64ノット) 以上～44m/s (85ノット) 未満
非常に強い	44m/s (85ノット) 以上～54m/s (105ノット) 未満
猛烈な	54m/s (105ノット) 以上

大きさの階級分け

階級	風速15m/s以上の半径
大型（大きい）	500km以上～800km未満
超大型（非常に大きい）	800km以上



5月19日の大町労山定期総会の報告は、次号になります。